

大学生の高齢者イメージの形成要因の検討

長野 有夏

日本では、急速な高齢化により社会に占める高齢者の割合が増加し、医療技術の進歩により人々の平均寿命や健康寿命が延伸した。そのため、以前に比べ、元気な高齢者から寝たきりの高齢者まで、高齢者の姿は多様化した。高齢者の増加に伴い、他の世代が高齢者に対する理解を深めることが求められる中で、人々の行動に影響を与えるイメージについて考えることは重要である。

日本では以前から、特に大学生がもつ高齢者に対するイメージの研究が進められてきた。ここでの高齢者とは一般的な高齢者全般を指すが、高齢者に対するイメージの研究には、回答者の高齢者に対するイメージが何に基づいて判断されたのかを明らかにしないまま調査されたものがある。そこで本研究は、大学生の一般的な高齢者に対するイメージと顔を想起した高齢者に対するイメージの類似性を検討することを目的とした。仮説では、大学生の一般的な高齢者に対するイメージと顔を想起した高齢者に対するイメージは類似すると仮定した。また、イメージの類似性に影響を与える要因として交流頻度と援助のやりとりについても検討した。

本研究の分析対象者は大学生・大学院生 171 名であった。調査は web 上で実施し、回答者に PC から回答してもらった。調査内容は、基本属性、一般的な高齢者に対するイメージ、顔を想起した高齢者に対するイメージ、類似性に影響を与えると考えられる要因であった。なお、顔を想起した高齢者についてはイメージを測定する前に 1 人選んでもらい、その人物との関係性も尋ねた。

大学生の一般的な高齢者に対するイメージと顔を想起した高齢者に対するイメージの両者に対する回答を合わせて因子分析を行った結果、【好感】【活発】【円熟】の 3 因子が抽出された。各イメージの【好感】、【活発】、【円熟】因子の因子得点の相関係数を算出したところ、【好感】【活発】因子では中程度の正の相関、【円熟】因子では弱い正の相関が見られた。また、因子ごとに、2 つのイメージの因子得点を用いて t 検定を行ったところ、全ての因子で顔を想起した高齢者に対するイメージの得点が一般的な高齢者に対するイメージの得点よりも有意に高かった。さらに各因子の因子得点をもとにクラスタ分析を行った結果、3 群に分けられ、それぞれ高印象群・中印象群・低印象群と名付けた。高印象群は一般的な高齢者に対するイメージと顔を想起した高齢者に対するイメージの両方で平均値が最も高く、両者に対して肯定的なイメージを持っていた。低印象群は一般的な高齢者に対するイメージと顔を想起した高齢者に対するイメージの両方で平均値が最も低く、両者に対して否定的なイメージを持っていた。中印象群は一般的な高齢者に対するイメージの平均値は低印象群と似ており否定的だったが、顔を想起した高齢者に対するイメージは高印象群と似ており肯定的であった。また、各群における 2 つのイメージの差を検討するために、二要因分散分析を行った。その結果、低印象群が最も 2 つのイメージが類似していた。また、要因に関しては間接交流の頻度のみで、低印象群が高印象群よりも有意に少ないことが分かった。

以上より、低印象群では仮説は支持されたが、高印象群と中印象群では仮説は支持されなかった。また、低印象群で 2 つのイメージが最も類似した理由として、顔を想起した高齢者に対してそもそも否定的な感情を抱いていたために、2 つのイメージが類似した可能性と、顔を想起した高齢者との関わりが弱いために印象が弱く、特定の高齢者のイメージが肯定的になりやすかった結果、2 つのイメージが類似した可能性が考えられた。本研究結果を受けて、今回は 2 つのイメージやクラスタ間に差をもたらす要因について十分な検討ができなかったため、今後さらなる検討が望まれる。(臨床死生学・老年行動学)